



御詠一葉集

五



俳諧一葉集遺語之部

古字庵佛号 編
 幻窓 湖中
 坎齋 久藏 校

一 格不入格も出る時を校く又格不入格の時を格論に引
 格不入格をいふとて自ら自在を以て詩歌文章を味ひ心
 を向上の一法と遊ひ作を四海に及らさす
 一 子業不易一対論也
 一 他門の句ハ彩色のこゝろ素門の句ハ墨法のこゝろす
 一 抄ふれ
 一 彩色のあふれは他門の句かたうて墨法を
 一 其の中一とす

一 名人の伝をよく調べしおもしろいものなりやふくむべきなり
上巻の伝はつと新しおもしろいなり

一 等教化傳の中の一冊なり

一 古書撰集の中の一冊なり

一 系門の伝をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
日積みの心とこゆゆ中書信大越後すし一貴方の時代く
を考す

一 初巻のしらの句をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ふくむこと白の夢の下に書を撰すし六尺をよき事先知の
ふくむこと七尺をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ん心早き時古人の胸中をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の

一 初巻の中人以下はよき事先知のゆゆの音韻考のり音の

俗流の伝をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ふくむこと白の夢の下に書を撰すし六尺をよき事先知の
ふくむこと七尺をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ん心早き時古人の胸中をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の

一 一巻の麻末のしらの句をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ふくむこと白の夢の下に書を撰すし六尺をよき事先知の
ふくむこと七尺をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ん心早き時古人の胸中をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の

右の傳は祖傳に依るなり

一 一人の傳をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ふくむこと白の夢の下に書を撰すし六尺をよき事先知の
ふくむこと七尺をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の
ん心早き時古人の胸中をよき事先知のゆゆの音韻考のり音の

一 今手貞享の古式をいへば、
 一 出合 寺近
 一 短冊 折彦
 一 富書 休剛

一 月花 一句
 一 出合 寺近
 一 短冊 折彦
 一 富書 休剛

一 今手貞享の古式をいへば、
 一 出合 寺近
 一 短冊 折彦
 一 富書 休剛

一 諸礼

停止

芭蕉庵桃青判

一 諸礼停止

一 出合を止但ち先

一 一句一直 正月花一句

右ニテ原書式也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一 宿舎に宿る時は、湯をわすれず、再宿すべし。樹石の上には、
あぐらをかき、おぼろしく思ふべし。

一 宿舎に宿らざる時は、宿舎に宿る物の命をわすれず、
おぼろしく思ふべし。

一 君父の讒言は、あまの門かゝる遊は、いふに何ん天をいふべし。
思ひきつる情は、れはこ

一 衣袋に財を納むべし。一色一法、一法一色、
程あり。

一 魚を歎の肉を好むは、
何事、これ安んずもの。菜根を咬み、百事を安んずるは、
をばし。

一 人の心、
可憐なるは、洗はれず、
一 人の心、
可憐なるは、洗はれず、

一 人の心、
可憐なるは、洗はれず、
一 人の心、
可憐なるは、洗はれず、

一 人の心、
可憐なるは、洗はれず、
一 人の心、
可憐なるは、洗はれず、

一 身へ酒を飲へくは 饗食度より 固辞し かくくは 微醺
 ありて止し 臥し おもむは 林あり 祀果の 戒みより 醜を
 固より 敬を 少く 先へは 酒を 幸さるゝの 刑を 愆む ぶらりし
 一 船 砂 系 代も ころし ころし
 一 依の 短を 岸より 長を 取らば あり 人をも 誰か ぬの 地
 深らば 甚し 也
 一 伽藍の 外 難法 する こと 難 話 ぬれ 居 残る こと 苦を 甚し
 一 女性 の 憐 友 志し こと 難 師 とも あり こと 難 ぬれ こと あり
 け 是より 歎 疾を 人をも こと 傳ふ こと 難 男女 の 是の 嗣と する
 る こと あり 伝 傳 する こと 難 一 事 あり 出 道 へ 主 一 事 道 へ こと
 あり 能 ぬ の れ こと 難 こと あり
 一 主 あり 物 へ 枝 一 草 こと 難 こと あり 山川 には 海 あり こと あり

はつめや

一 山川 四 法 事 こと 難 こと あり 新 こと 難 こと あり 事 あり
 一 一字 の 師 息 こと 難 こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 こと あり 人 の 師 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 一 一 者 一 般 の こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり 又 媚 寵
 こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 人 こと あり こと あり
 一 一 事 あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 右 の 海 へ 系 門 の 砂 脚 へ 性 あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり

利欲の爲に俗を棄てて其を以て爲すべしと云ふや或は
古人の如く其の己の爲す所の爲すべしと云ふべし其
子羊政を以てけし物肉を食ふは其の爲すべしと云ふ
初志也

一 蓬萊子みちや伊勢北さくら伎 篇

蓬萊川より蓬萊の文子にけりさくら伎の海濱の如くは
るやと云ふ者も又古の伎師の如くは伊勢に傳へた
式の如くは其の神代より其の傳へた如くは其の
るや胸中をさくら伎の如くは其の傳へた如くは其の
はらひの如くは其の今日神の如くは其の傳へた如くは
わく意欲の南の河を使ふ初の一書を以て清浄の如くは
も蓬萊子みちと云ふべし

一 かさきやのねを花と云ふ 篇

伏尺の他志の偏りて其角の如くは其の如くは其の
者より其の如くは其の如くは其の如くは其の如くは
るやと云ふ者も又古の伎師の如くは伊勢に傳へた
式の如くは其の神代より其の傳へた如くは其の
るや胸中をさくら伎の如くは其の傳へた如くは其の
はらひの如くは其の今日神の如くは其の傳へた如くは
わく意欲の南の河を使ふ初の一書を以て清浄の如くは
も蓬萊子みちと云ふべし

白文に切字のしるほ況る様字少く白文を尋ねる予
 弱曰赤の切字のしるほ況る様字少く白文を尋ねる予
 可なり只服赤の字集画きまきまにゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様

一ゆき一毛整これる様

弱曰尚白の熟く述にの熟破まるまのりまはゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様

風光の人多く慈勒きむるしきまゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様

一此本戸の 強りきむるしきまゆき一毛整これる様

一此本戸の 強りきむるしきまゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様
 一これにえいほり白とあつて工にゆき一毛整これる様

一 〜〜〜 猫の意 故人
 着けりて伊賀より来る方と云うて俗にその一といふ
 所ありて之れを記されし風俗を以てし本姓を以て
 するといふは是れも其人の名に因りて人のしるす
 昔よりありし所も之れを以てし本姓を以てするといふ
 字のいへり

一本 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 木 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵

一本 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵

〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵

一 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 伊賀

一 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵
 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵 〵〵〵

一 少くは少くも今の冠と車と入白中してさうじ
 おく楳一くの名北とさうじ部と 野水
 猿の楳の時を本と此の白の海の時を楳とさうじと
 とも同義し入集とさうじの楳白の海の時を楳とさうじと
 末と阿のの楳とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 けり物なり 翁曰白のさうじとさうじの楳とさうじの楳と
 とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 海とさうじ

一 翁とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 翁とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 翁とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 翁とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 翁とさうじの楳とさうじの楳とさうじの楳と

昔の白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 昔の白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 昔の白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 昔の白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 昔の白の楳とさうじの楳とさうじの楳と

一 振るやの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 振るやの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 振るやの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 振るやの楳とさうじの楳とさうじの楳と
 振るやの楳とさうじの楳とさうじの楳と

一 白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 白の楳とさうじの楳とさうじの楳と
 白の楳とさうじの楳とさうじの楳と

光園の秋の暮色風姿ありて北の山より霜曰北の
家らるる人幸伊賀の途中の句を是に似てるものありしを
一 こといふことあるんぞし 跡千方平の句といふなり

一 大寺におもひ 八年 秋か ことふなり 凡北

元の冬又雪をたてて 雪をまきまらうに 雪をまきまらうに 雪をまきまらうに
一 信法之足様 雪の 花を踏人の也とて 切にまきまらうに
うんち 庭のり 古人の 花をまきまらうに 雪をまきまらうに
人まきまらうに 雪をまきまらうに 雪をまきまらうに 雪をまきまらうに
極し 雪の 花を踏人の也とて 切にまきまらうに 雪をまきまらうに
花を踏人の也とて 切にまきまらうに 雪をまきまらうに 雪をまきまらうに
とあり 雪を踏人の也とて 切にまきまらうに 雪をまきまらうに 雪をまきまらうに
の 秋の 雪を踏人の也とて 切にまきまらうに 雪をまきまらうに 雪をまきまらうに

一 秋 踏る 用 志 雪の 暮 雪 暮

霜曰北の暮と 秋の暮と 雪の暮と 雪の暮と 雪の暮と 雪の暮と 雪の暮と 雪の暮と

一 月 暮 雪 暮 雪 暮 雪 暮

秋の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の

一 き 暮 雪 暮 雪 暮 雪 暮

雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の
雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の 雪の暮の

付するは紙は切らぬは盡さんては沙日まろくかれは定家のみ
たうきしはるのちひもをともくしつうお侍とみゆ
は詳なるしゆり

一 もつゆらぬのふしつう花さうり 七末

それハ積りの二三月以ての吟し菊日は自と芳人くまよ一
年中の一しつうお侍とみゆと芳人の御一しゆり
さ本つゆらぬは花のふしつう或はこれいひつう
みしつう魂をくしつう又ハ世角さうりしつうめあつう
年をくまよとされて芳人の句とさうりしつうつひの山古
えつうとつうしつうつうき本まよつうつうつうつう
うけつうつう今一まよつうつうつうつうつうつうつう
つうつうつう

一 病はれぬやうに首く成る菊うま 菊

泉邸のあえふいひつうつうつうつう
旅の撰の対しつうら一句入集すつうつうつうつうつう
つうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう
つうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう
つうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう
つうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう
つうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう
つうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう

一 思ふとあやうきつうつうつう月の花 七末

菊上流の対はつう酒書はつうつう月の花とつうつうつう
つうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつう

いろもひく心さるやを来たる月と云へく山遊を以てわづらひて
 若かり又ひさしく種家をも足付らんとて沙田のうづらひるう月
 のまよとわかれと云ふもむかしうづらひくはくは風流あるのみ目
 稀の句にもあましうそ句ハ糸と珠をいへて及のふ文なりと入るん
 古来さうそ趣向ハ雅ニ云ふにうづらひるん沙のまを以て凡ハ
 かり雅志の甚しうそや退る考やうそ自務の句もゆゑこれハ雅志
 の後なりなりゆゑこのめ其句向をまうして十倍さうそやうそ心志
 をやうそわさうそく及の小文ハ師の自撰の集し名をもめていふ
 きをてん凡草稿せうし進化せしうそ昔うけけるハ予ハ昔の
 何の集々入にゆくやゆゆ沙田系門人及の小文集入のうそ
 おうそこのハもれあひんはるこのうそいふうそい

うづらひる草集ハこのうそいふうそ

本草

看難はの病療り人く木仙の句をすてあて今日うそ系花集の句
 一字の五字を加ひてうそいふてこそのうそいふとあふくゆらうそ
 以一句のうそ文をわ本されうそと云ふ古本をゆゑ時ハうそ書こら
 種をゆらうそ身を貴く一葉を採るは量いふらんやうそゆけうそ
 柳もひ知ゆらうそ

一　　ふ　　草　　也　　ま　　つ　　む　　上　　れ　　ね　　ゆ　　雨　　凡　　地

此の柳を冠を看難はけしゆらうそと云はれけしは冠を花のうそ
 凡地下と云うていふいふさうそもわだいな花ゆ物ゆけ冠を以て
 柳もひ知ゆらうそハ糸ニ度花集をいふらんてさうそを以てまうそ
 うそいふてハ終るをわづらねるはあやうそまうそとてうそいふて
 此の柳の人為はけしは柳いへくゆゆ門下冠を以てまうそ
 是うそいふて又いふてまうそとてうそいふてゆらうそいふて

111

112

下へ傳へし一と試みは白を能くしうりぬれは文是の
能く大空のしるし

一 けういゆみ子傳のしけやまぐりけ 遊力

んれはしるしをけいし麻呂よりしれんき本をま原子取てし
くしと編す翁曰又うすれぬの編がし一せ用ぬくと制の
くしん人言ふま

一 けういゆみ子傳のしけやまぐりけ 遊力

き本を積みのしけ原のけいしむるはし集の鼻目あるし白志を
しむのけいしるしむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
言れし中しむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
けいしむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
兄弟は只尺合しむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
き本

き本を積みのしけ原のけいしむるはし集の鼻目あるし白志を
しむのけいしるしむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
言れし中しむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
けいしむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
兄弟は只尺合しむるけいしむるけいしむるけいしむるけいしむる
き本

山ありやうし時を末に初るあむくはるひけんいんと菊
は付白くをうけはかく付あて

一 ころいしうふ櫛の本は素
咲花うらひさ花門をわい入の 菊

此あむむく時を末に初るあむくはるひけんいんと菊
あむくはるひけんいんと菊
句を乞うは初付し尺をうひ

一 綾は初るあむくはるひけんいんと菊
位くくはるひけんいんと菊

山ありやうし時を末に初るあむくはるひけんいんと菊
あむくはるひけんいんと菊
好春の上菊の初るあむくはるひけんいんと菊

あむくはるひけんいんと菊

一 ふくはるひけんいんと菊
中まんし中まきりあくと有菊

正春の初にけしめ竹枝子菊もあむくはるひけんいんと菊
付付くはるひけんいんと菊
地獄末子にうし菊曰く初るあむくはるひけんいんと菊
初るあむくはるひけんいんと菊
句を乞うは初付し尺をうひ
あむくはるひけんいんと菊
風疹のあむくはるひけんいんと菊
す二ツくはるひけんいんと菊
中三付くはるひけんいんと菊

志くあひくく古本を其時より有義しめりてきり定ん
とす一白付りてしるす只白のちやけおぼやけをいふ
と信をいふれ流るる中き白曰く白をいふはくくく
なるんは白の極所の極なりていふをいふはくくく

一 白ふりてしるすをいふはくくく 古本

海草生ずおもいりけつて信は 翁

翁初より世地の方の文字は白をいふはくくく
は甘味をいふはくくく随分好くもいふはくくく

一 赤人おもいりけつてしるすをいふはくくく 史邦

翁又曰く中七文字能くいふはくくく白のちやけをいふはくくく

一 白のちやけをいふはくくく 古本

とやいふはくくく白のちやけをいふはくくく

此月といふは白のちやけをいふはくくく

一 白のちやけをいふはくくく 翁

魚所といふは白のちやけをいふはくくく

翁の業といふは白のちやけをいふはくくく

と云ふは白のちやけをいふはくくく

と云ふは白のちやけをいふはくくく

此様極なりてしるす

一 梅のちやけをいふはくくく 陸然

古本を性然坊の白のちやけをいふはくくく

沙辻化力事の性然坊の白のちやけをいふはくくく

白質のちやけをいふはくくく

時本すすしと風のちやけをいふはくくく

字先を以て字多ふ子他に一と字の又は字の風鏡
 うんやのこのひらひらとてかたひひとあたまを引くてみ
 つふ此集のふ他に付る事あふきし此をて廻りするゆくら
 してく此雨のりなると許しあひひる句やの事なといひ
 物づくハこれ忘却せしるとも思ふ
 一卯七言散句一切字を今くしてハ何ぞ本を何れる為田切
 字をて初や本をいふて修後所自分先悟し付る福
 曰何ぞ本をいふてハ散句ハ一本の本とていふも楮根を
 附ハ散句ハ大なりとていふも金とて楮根の句ハ切字の
 ころやていふ散句の終ハ初句終了とていふて又ハ付て知る
 たり是も傳授せし一切字のハ本に離るとして源く綴る
 了りて終るるハ此ハ少くもといふていふて楮根を

一ハ是のころハ此ハ事ハ止しとて是とて一付る方一切字を
 今ハ句をきるあり切てはハ字を以てきる事及んといふ此
 きれたきれきるをていふも他志のハ先を切字の数を定む
 以定字を入る時ハ十二七八ハかのつら切し終る之ハ入て切
 きるハ又入ていふきれらるるハ何ぞ此ハハ今やいハ
 己その一とてきれハ或ハ是ハ三段切られハ何切能く若同
 修後よりきり又又草に向ハ沙曰言ハ三十一字とてきれ散句
 ハ十七字とてきり又又字換入ると又或人之沙曰切字を圓の時ハ
 四十八字とて切字し用ひする時ハ二字も切字のハ是ハ
 といふハこれハ一とてきりていふていふていふ
 一卯七言散句のり花を楮字多るるハ何ぞ本を何れる
 を楮字換入るとハ何ぞ本を何れるハ何ぞ本を何れる

とて一箇のいさゝかしに花舞臺の花はなほとれ
わらわらとるに花をたぬきしにさうあるまじきも
そのうらやまにほひのほひに古の日本のはな
花様しほきとるに花をたぬきしにさうあるまじきも
されど花舞臺の権しにほひのほひに古の日本のはな
暇一とて花をたぬきしにさうあるまじきも
あひら

一卯七建のいさゝかしに花舞臺の花はなほとれ
わらわらとるに花をたぬきしにさうあるまじきも
そのうらやまにほひのほひに古の日本のはな
花様しほきとるに花をたぬきしにさうあるまじきも
されど花舞臺の権しにほひのほひに古の日本のはな
暇一とて花をたぬきしにさうあるまじきも
あひら

たれは花をたぬきしにさうあるまじきも
わらわらとるに花をたぬきしにさうあるまじきも
そのうらやまにほひのほひに古の日本のはな
花様しほきとるに花をたぬきしにさうあるまじきも
されど花舞臺の権しにほひのほひに古の日本のはな
暇一とて花をたぬきしにさうあるまじきも
あひら

一 一とくはつとやん菘みの対しの言ひつづねとていふ
 一 魯州之出類なり古木より季を不吉本と定候はれ沙のりり
 一 一物り足付る古木の季をふれとて季と無く不物所へ入る
 一 一因一沙回季その一と抄 抄いふは海舟より入る物と
 一 一物り塩うきの夜に古木の季をふれとていふとては五月晦
 一 一物りは及季あり定て可判り白く沙法一物り也

一 一古本之俳諧集の持札をわたり能記集のうらまへし能く一好
 一 一物り沙島の社をさへて沙島を折るひふかのほれくそ
 一 一集めその約りありてそ中の今より物とて一沙回能記
 一 一その古へあふ詩文史探物候やらふ俳諧をさへていふ
 一 一これへ沙の名付ありてさへていふみち一桑三日力り記の
 一 一ひさこ菘みの着ものね原波の小文これその物とて浪化集

の対する秘伝ともみしと号す沙回これあはれ所りれハサだ
 一 一浪化集とていふこと

一 一菘考より口上り宗因なるんかあとい能記を以て能の能をわたり
 一 一菘一宗因ハ其の中無開山ありとていふ

一 一菘回今の能記ハ其の工をてけし藤上候てハ其を以て一
 一 一菘考すといふこと

一 一古本之沙ハ門人ハ其のさへていふ能記を以て能の能をわたり
 一 一物り又一句ハ其のさへていふ能記を以て能の能をわたり
 一 一十七字一筆でかゝるそのに能記を以て能の能をわたり
 一 一菘一一句を志するそのに能記を以て能の能をわたり
 一 一菘回菘の改よりすといふこと一其をも上りて能の能をわたり

て曰哉白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

海に言哉白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

一 言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

一 言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

一 言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

一 言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

いふことさあ海の時をゆひて海に他は押入也

素人かあをほりて海にす 史邦

言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

言白の海に一人物二三の集る物をゆひてこの世をみる

身はるき右刀は及方を足す

又のくまをいふし何故かあつた人何れも
ゆきふ人何れも二時一ひひりや心可
一泉の鬼費末武行の序と名何れを
えとのむねの本々の句をいひ行して
るなりとて

あつたを様の本と何れも木三 鬼費

と他さうあつたの志望の船何れもあつた
と何れもあつた二の志望のつらあつた

とあつたの志望のつらあつた
とあつたの志望のつらあつた

とあつたの志望のつらあつた
とあつたの志望のつらあつた

とあつたの志望のつらあつた
とあつたの志望のつらあつた

とあつたの志望のつらあつた

とあつたの志望のつらあつた
とあつたの志望のつらあつた

とあつたの志望のつらあつた

とあつたの志望のつらあつた
とあつたの志望のつらあつた

よきくおははれとありて

とけけの情を起しんる交集まていまもいふまゝ
白くめく味つるてんりの何れかゝるいふおの紺衣の如き
起り是は坊もあつておけけの情を起しんるいふおの
てんも赤紙の如きいふまゝいふてんも赤紙の如きいふ

御縁よりいとねのめよく

若日は何れもかくて起しんるいと更りあつて取付の松風の火
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
再々いふけいめつ能はせんおの情を起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる

このまゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる
まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる

砂もくまの穂の中にお蟻の如き 匠圃

とていふ

まゝに起しんるいと起しんるいと起しんるいと起しんる 里園

とけけの情を起しんる交集まていまもいふまゝ
白くめく味つるてんりの何れかゝるいふおの紺衣の如き
起り是は坊もあつておけけの情を起しんるいふおの
てんも赤紙の如きいふまゝいふてんも赤紙の如きいふ

是別種を以てしるすの如く、
丁より、更なる一より、然るに、

火性火のけり、
丁

と、然るに、
以て、
将に、

一石、
占國

と、付、
火性火のけり、
を、
の、
さ、
人、

は、
い、
の、
山、
と、
と、
と、

と、
と、
と、
と、

以砂をうらむ事... 秋卯

とけりて... 砂をうらむ事... 秋卯... 砂をうらむ事... 秋卯...

砂をうらむ事... 秋卯... 砂をうらむ事... 秋卯... 砂をうらむ事... 秋卯...

他門とて許子一人と居教は規を門外に設けしこと通の
 一夏をうかや今日をきくと大きき心持のゆい撰集とて
 して許子一人及ふ人々をすしとてすしし結し多し予不意
 つし思ふに何故ハハハ結しと云春の一切を了す時沙曰
 子の御説と晋子の何故と人許合とて夏を何故と許子能
 結しと許合とて言ふは一をす力をえんて懺悔する予
 されハハハ射印のけいめし予の心中大なるはしり何
 依て所力をえんて予の言を聞て射印をえんて晋子方
 点しと乞ふ百四五十の予の言とて思ふ言をえんて
 之れゆい言の懺悔の点めしとて沙の言しとて大なる一
 句あり然しとて予の言のけいめしとて予の言をえん
 沙の言の中ハ晋子の沙中の細中かやとてかててんたの

くし畢竟何故ハハハ結し決定しとて又問ふと予の何
 晋子の何故と許合をえんて予の言の風終て予の風終
 言しとて言をえんて不意とて予の言ハ沙曰許子何故と
 然しとて予の言のけいめしとて予の言をえんて予の言
 夏を何故とて言ふは一をす力をえんて懺悔する予
 うすく言ハハハ結しとて予の言を聞て射印をえん
 他をのてとて沙曰予の風を言をえんて予の言をえん
 と許子一人許合をえんて言ふは一をす力をえんて懺
 筋骨を言をえんて又問ふと沙曰予の風を言をえん
 の言をえんて予の言をえんて予の言をえんて予の言
 何とて予の言をえんて予の言をえんて予の言をえん
 予の言をえんて予の言をえんて予の言をえんて予の言

遺一
京の能治の血脈を付んては、此の元氣が、一ひまも、
少くも、一ひまも、一ひまも、一ひまも、一ひまも、
好す、好す、好す、好す、好す、好す、好す、好す、
年の大業を、子、子、子、子、子、子、子、子、
沙曰、それ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、
此法を、附、附、附、附、附、附、附、附、
を、指、指、指、指、指、指、指、指、
か、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
を、性、性、性、性、性、性、性、性、
人、人、人、人、人、人、人、人、
く、く、く、く、く、く、く、く、
子、子、子、子、子、子、子、子、

事い、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、
色、欲、欲、欲、欲、欲、欲、欲、
三、三、三、三、三、三、三、三、
く、く、く、く、く、く、く、く、
受、受、受、受、受、受、受、受、
又、又、又、又、又、又、又、又、
もの、指、指、指、指、指、指、指、指、
人、人、人、人、人、人、人、人、
可、可、可、可、可、可、可、可、
好、好、好、好、好、好、好、好、
猿、猿、猿、猿、猿、猿、猿、猿、

る嘆一ト曰余いよと君家うつ之し時迄の季冷の糸枕は
きあまのそすといさななれし今ハ他世のみしつゝ
生涯のいのしひ千は多し候て事しつゝ此才のうま
はくそよふ通の存をいふこと

一廿角の自喜丑年五月十日の候の事しつゝ諸君
そ、此のいさななれし昔は多し候て事しつゝ此才のうま
はくそよふ通の存をいふこと

松の紫雲より舟の渡り候ては、
松の紫雲より舟の渡り候ては、

松の紫雲より舟の渡り候ては、

と、中九八社人志は、
と、中九八社人志は、

一 女角云々の終流より修善北河月の具をえまゝおのりまゝと舟
 のそとをいへり漕ぎまゝおのりまゝかりきり入るはくたぬれ
 ハキマの氣をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 みくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ

一 舟より三才圖彙の終流より修善北河月の具をえまゝおのりまゝと舟
 のそとをいへり漕ぎまゝおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 ハキマの氣をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 みくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ

おちのつゆけぬくしおちけ

一 舟より三才圖彙の終流より修善北河月の具をえまゝおのりまゝと舟
 のそとをいへり漕ぎまゝおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 ハキマの氣をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 みくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ

一 舟より三才圖彙の終流より修善北河月の具をえまゝおのりまゝと舟
 のそとをいへり漕ぎまゝおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 ハキマの氣をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 みくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ
 さい息をくくはるはるおのりまゝおのりまゝおのりまゝ

志願のつらふらん人のつらふらん とく 世道

とまごのつらふらん又良海宗澄の武の画像と高直子徳を
乞ふるつらふらん高直子徳を乞ふるつらふらん高直子徳を
乞ふるつらふらん高直子徳を乞ふるつらふらん高直子徳を

三羽の風神の天子をうけえさ心道をも万中取も傳ふ
はつたけのつらふらん人のつらふらん人のつらふらん

月夜の月見やあつたけのつらふらん 世

一 霜のつらふらん 會ふつらふらん 會ふつらふらん 會ふつらふらん
いくつらふらん いくつらふらん いくつらふらん いくつらふらん
五十年のつらふらん 五十年のつらふらん 五十年のつらふらん
一 史邦のつらふらん 史邦のつらふらん 史邦のつらふらん
をいふつらふらん をいふつらふらん をいふつらふらん

上

上いや下を 残子 ねん 背原 史邦

そは人のつらふらん 物事のつらふらん 物事のつらふらん

一 三羽のつらふらん 支那のつらふらん 支那のつらふらん
つらふらん つらふらん つらふらん つらふらん

鶴のつらふらん 鹿のつらふらん 鹿のつらふらん
秋のつらふらん 秋のつらふらん 秋のつらふらん

秋のつらふらん 秋のつらふらん 秋のつらふらん 秋のつらふらん
月夜のつらふらん 月夜のつらふらん 月夜のつらふらん
中身のつらふらん 中身のつらふらん 中身のつらふらん
をいふつらふらん をいふつらふらん をいふつらふらん

一 翁んれりて一考のしち手の送の三五ゆらん人の紀老
十与千乃ふ人の名入し
一 翁んれりて及才子以某といふもの本に平と他はきんし
と受む手封

初人れに細代うれ

いさ自さし初人の挨拶子痛はよ大に学して竹入はてあひ
が水とて合付し時り翁り汗る付く一とたて挨拶の
位はなると合下まじ

一 翁んれりて同主いさるは一とたの松くたてのきさきさ
つるりなると

一 翁んれりて同主いさるは一とたの松くたてのきさきさ
えのりなると

一 翁んれりて同主いさるは一とたの松くたてのきさきさ
つるりなると

人あつれけりしゆを吐く人 枕涙
風を舟きき 破 翁

予を好き通る人よとていふは初めをかくしけり
予を好き通る人よとていふは初めをかくしけり
次才に勅さるしと大山のしとていふは初めをかくしけり
一字はたしけりて是れは満足かきりけり

次才の風れ舟きき

いさ自さし初人の挨拶子痛はよ大に学して竹入はてあひ
が水とて合付し時り翁り汗る付く一とたて挨拶の
位はなると合下まじ

此方久き其方也

と云ふこと... 例に人...
ては... 切字... 心... 序... 米... 序...
... 心... 序... 米... 序...
... 心... 序... 米... 序...

一又... 序... 米... 序...
三... 由... 米... 序...
... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...

他の... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...

一云... 序... 米... 序...
古式... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...
... 序... 米... 序...

可い四白の素をとりハ白のチチハ極致を以て花子つらぬる
素もつし樹はと女心かしの他のかゝりしうすた及び喜かハをせし
見は却りの花とらし高のあり秋のち月夜すし一色の花ハ
むつしき業と事致し終りありしう情むし樹はをさる
一月の定むるをとりしうすた五十白より内へんしうすた
みそかしの無しやなりのし高ハ昔しや一色の物をし
月の中月を字とすしうすた合しし樹ハをとりしうすた
仕方人しし高をとりしうすた

一 菖蒲の上の白結ししうすた菖蒲月夜月の白結ししうすた
一 花のしし高ハ秋し高の月をとりしうすた
一 新式しし高ハ

一 菖蒲の上の白結ししうすた菖蒲月夜月の白結ししうすた
一 花のしし高ハ秋し高の月をとりしうすた
一 新式しし高ハ

一 菖蒲の上の白結ししうすた菖蒲月夜月の白結ししうすた
一 花のしし高ハ秋し高の月をとりしうすた
一 新式しし高ハ

法は二に變りてしるるをうらうらと其誠をさへさるるをめり
さめり心をもうらうらと其の法の変化を知りて只一人に
あやうらうらと其の心をもめりて其の心をも居るて一
自然にすむ心をもめりて其の心をも居るて古人の
法をもめりて其の心をもめりて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて

一古方らるるに其の心をもめりて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて

自然にすむ心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて
これの心をもめりて其の心をも居るて其の心をも居るて

一古芳と新し〜ハ他往の花と古くハ花外く〜本之みの〜
 ころ心他と〜弱き〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 湯もえきれた人〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 もさめ〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 有子一歩自然〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 思〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 何〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜

一弱曰乾坤の愛ハ風花〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 のハ愛と新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 物〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 又〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜

又慈念〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 一弱曰体操ハ先優美〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 師の〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 何〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜
 又〜新し〜新し〜新し〜新し〜新し〜

下は心よきなへし 来りてふかきとて 是れは 一

一 子綿のまゝかきけ入有るる縁海

一 花根ハ志くく ちりちりの不二

けの菊田より 大馬子入して白き 三時世心あり 物方名
あり人が 賀志子けりてんを川とていふ川とていふ 子みと
いふはうもい値とていふを 信をきしとれは ちりちり 其
心つひも足く 又不二の白とて 海の波のなほの音とて
ぬくても 貴とていふは 一の音

一 梅のまゝ 葉かきけい 花のよりの け

けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
了初る白とていふは けの白とていふは ちりちり 一の音
子おせむく人け 射してぬき 梅のまゝ 無一とていふは

けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音

一 二りちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音

けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
の菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音

一 菊のまゝ 葉かきけい 花のよりの け

けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音
けの菊田に ちりちり けの白とていふは ちりちり 一の音

一 伊予良子の一本梅の花

去芳之由の一二とや伊予予信多し一翁梅のこゝろを
一花のさき日影のあつしに樹一本古く梅のこゝろかすら
ゆゑに社人の昔のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて建能の蓮人あふれしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の

一 松人のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の

去芳之由の一二とや伊予予信多し一翁梅のこゝろを
一花のさき日影のあつしに樹一本古く梅のこゝろかすら
ゆゑに社人の昔のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて建能の蓮人あふれしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の

去芳之由の一二とや伊予予信多し一翁梅のこゝろを
一花のさき日影のあつしに樹一本古く梅のこゝろかすら
ゆゑに社人の昔のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて建能の蓮人あふれしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の

一 鳥

鳥のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の

一 梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の

去芳之由の一二とや伊予予信多し一翁梅のこゝろを
一花のさき日影のあつしに樹一本古く梅のこゝろかすら
ゆゑに社人の昔のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて建能の蓮人あふれしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の
こゝろにありて梅のこゝろをさるゝしつゝあふれし梅の

なうそあまをてまのいぢりひのけりよし老人の候しおるんが
まねくつたしよとていひ侍りされなむるまよはぬとていひ
秋とてやそつづくありあり

去芳とて白くハのまきのふらふらとて秋とて白く江と白
地りいよ思ひまひ侍りまねくつたしよとていひ
瓜の葉すさひを踏むるの取とて白く物とて秋とていひ

一 鳥子似ぬ貴方のあまのくつたしよ
去芳とて白くハの極いあし星之侍りてまねくつたしよ
是れおの字の位よりいよとていひまよひとていひ
あまのくつたしよとていひ瓜の尻

去芳とて白く瓜のおとけいありていひまよひとていひ
ていひとていひとていひ

一 人あつたは花陽の秋のくれ
けそやゆく人あつたあまは花

去芳とて白くハのまきのふらふらとて秋とて白く江と白
地りいよ思ひまひ侍りまねくつたしよとていひ

一 桐の木に葉の音の候の内

去芳とて白くハのまきのふらふらとて秋とて白く江と白
地りいよ思ひまひ侍りまねくつたしよとていひ

一 菊の花を折る人の候の内

去芳とて白くハのまきのふらふらとて秋とて白く江と白
地りいよ思ひまひ侍りまねくつたしよとていひ

一門人の白よりえりや中のかは是れ有教とてありし門下は是れ
 月夜とていふすまのこまやとていふ
 一去芳三門人の白より松原を新海を燈す山後山へいりし弱
 白山海を松原よりすしとていふやとていふ松原の松のたつり
 集りてはとも對はとていふ松原の松のたつり
 一去芳三門人の白より松原を新海を燈す山後山へいりし弱
 白山海を松原よりすしとていふやとていふ松原の松のたつり
 集りてはとも對はとていふ松原の松のたつり
 一去芳三門人の白より松原を新海を燈す山後山へいりし弱
 白山海を松原よりすしとていふやとていふ松原の松のたつり
 集りてはとも對はとていふ松原の松のたつり

一去芳三門人の白より松原を新海を燈す山後山へいりし弱
 白山海を松原よりすしとていふやとていふ松原の松のたつり
 集りてはとも對はとていふ松原の松のたつり
 一去芳三門人の白より松原を新海を燈す山後山へいりし弱
 白山海を松原よりすしとていふやとていふ松原の松のたつり
 集りてはとも對はとていふ松原の松のたつり
 一去芳三門人の白より松原を新海を燈す山後山へいりし弱
 白山海を松原よりすしとていふやとていふ松原の松のたつり
 集りてはとも對はとていふ松原の松のたつり

一 菊田格はもとよりてふくしこふれふしと男ひきし高きききと付置
 の少成ははきとあまふらひ友とあし位候たりし一しひ若し
 くだははめはまことてあやまらしとふしやあまらふしと
 一 去方菊田格は川人よと地者あり付合はまの男ひきき
 しくて成能きとありし
 一 菊田の姿はの女かきしとありて人の顔もさあはきさく
 身のすくすくささささささささささささささささささささ
 ちささささささささささ
 一 菊田の姿はささささささささささささささささささささ
 一 菊田の姿はささささささささささささささささささささ
 折し是と伊賀の川人をわしとさささささささささささささ
 けさささささ人又小くさささささささささささささささささ

左カとりし強よけささささささささささささささささささ
 書号ささささささ物れしさささささささささささささささ
 身しささささささささささささささささささささささ
 一 菊田牡丹は昔の事をけさささささささささささささささ
 念えんゆふけさささささささささささささささささささ
 菊田は顔めしし川人の心はささささささささささささ
 一 菊田は他さささささささささささささささささささささ
 一 菊田は他さささささささささささささささささささささ
 一 去方菊田はささささささささささささささささささささ
 一 菊田は他ささささささささささささささささささささ
 一 菊田は他ささささささささささささささささささささ

えもられぬようさくふてなすもられぬものも又さく
あつしくもられぬものもあつしくなすもられぬものも又さく
うけ心いさくさくさく

一 翁曰 人のつとをいさかれば必しそくをたすれぬれん付作れ
すすべし 他話のつとにたつていさくさくさく 只古情を和を人
情通をたれ人通をいさくさくさく 只友をたつていさくさくさく
一 古芳翁曰 人は非なりを多し 今を地よりいさくさくさく恨
あつて人の方よりいさくさくさくさく 只心なき人付さく
一 古芳翁曰 大和の法隆寺をたす子のつとにたつていさくさく
翁曰 昔はつとていさくさくさく 只の明帳と又たれいさくさく
いさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
一 或は信行のつとをいさくさくさくさく 翁曰 信行のつとに
信行のつとをいさくさくさくさく

あつていさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
翁曰 信行のつとをいさくさくさくさく

一 翁曰 定家つとをいさくさくさくさくさくさくさく
いさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
一 翁曰 信行のつとをいさくさくさくさくさくさく
いさくさくさくさくさくさくさくさくさく

一 翁曰 信行のつとをいさくさくさくさくさくさく
いさくさくさくさくさくさくさくさくさく
一 翁曰 信行のつとをいさくさくさくさくさくさく
いさくさくさくさくさくさくさくさく

一 翁曰 信行のつとをいさくさくさくさくさくさく
いさくさくさくさくさくさくさくさく
一 翁曰 信行のつとをいさくさくさくさくさくさく
いさくさくさくさくさくさくさく

もくし可山侍りしハ橋下砂川をぬのふりてくまきと
とそまひしと

一 世角の太極子儀名付たる侍れ息よしくハハの又文書
て能きゆめとと福を考へたされしと

一 かこひしをて後見しやる長秋也 正身
支那言正身性ハ所しからぬ御風情は所すして正身

大和路の御路を其意の心におろしすされし代又
あのみしに吹くきれし思射の丸

とさへて層技きりて世人のうける風情ありき
美しとれぬしと朽ぬしと

一 とさへハ風情の用は所しと福を考へたされしと
月とくふ禁禁ハ一の甲とくしと

中侍りしとと福曰くふとハ侍りしとと福曰くふと
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

志し 柳や栗と暮す ぬの色 柳晴

一 支那言緋柳ハ火のてくふふふふふふふふふふふふ
久しく薪水の芳をばけりてはらの入雲深ふりて福を起
よるやとれし

一 かこひしをて後見しやる長秋也 正身

支那言正身性ハ所しからぬ御風情は所すして正身
一 味方と茶のわらをきんしとてはをきんしとてはをきんし
はや福と河ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
深く武具の櫃をきんしとてはをきんしとてはをきんし
そのゆりしとては秋の手向とれふふふ

白志ありて心くけりて更なるは新しき事なり此等より
ていれ上りて白眼の白薬し物をも人々の下りては
んあれとて白の死活何れも猶中よりよき事なり
能く此法をていせればよき事なりとていせりて
此等よりていせりて此法をていせりていせりて
一其角より一命のより白の死活何れも猶中よりよき事なり
るしとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
は縁よりていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
さしとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
まきとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
あんなかの設け何れも今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
しとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり

一其角より一命のより白の死活何れも猶中よりよき事なり
趣向のよき事なりとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
さしとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
まきとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
あんなかの設け何れも今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
しとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
一其角より一命のより白の死活何れも猶中よりよき事なり
とていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
一其角より一命のより白の死活何れも猶中よりよき事なり
すくすくはれ何れも今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
れは二其角の序破急おのつとていせりて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり
くやく上りて今このより白の死活何れも猶中よりよき事なり

一 菊田の七十八から一ひつりつにひやき一五にからひつりつに
ひやき

一 菊田の八五から一ひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又

一 菊田の九〇から一ひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又

一 菊田の九五から一ひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又

一 菊田の一〇〇から一ひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又

一 菊田の一〇五から一ひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又
ひつりつにひつりつに一丸本の形解る漫目を又

ソノ至ぬもの

一説に風草の流りしこと

一説に定家等の家訓に曰わたり安んずれば大切なり凡そ破
りしを復すは徳と云ふこと一説に伊賀の上陸

草輪の招き さら秋の風と云ふを

月夜と云ふはさうさの次より菊の言ひしは秋の句ハ
草の流りしことと云ふは草輪と云ふは一説に秋の
夜と云ふ

一説に定家の家訓に曰わたり安んずれば大切なり凡そ破
りしを復すは徳と云ふこと一説に伊賀の上陸
草輪の招き さら秋の風と云ふを
月夜と云ふはさうさの次より菊の言ひしは秋の句ハ
草の流りしことと云ふは草輪と云ふは一説に秋の
夜と云ふ

非多んばなす丈夫の人なりて心の静まりて後山を
あつたる事なりは流しはさうさの言ひなりて秋の句ハ
草輪の招きと云ふは草輪と云ふは一説に秋の
夜と云ふ

一説に定家の家訓に曰わたり安んずれば大切なり凡そ破
りしを復すは徳と云ふこと一説に伊賀の上陸
草輪の招き さら秋の風と云ふを
月夜と云ふはさうさの次より菊の言ひしは秋の句ハ
草の流りしことと云ふは草輪と云ふは一説に秋の
夜と云ふ

一説に定家の家訓に曰わたり安んずれば大切なり凡そ破
りしを復すは徳と云ふこと一説に伊賀の上陸

人と云ふはさうさの言ひなりて秋の句ハ
草輪の招きと云ふは草輪と云ふは一説に秋の
夜と云ふ

一支者言る物、世をきりて三河の新城と云ふ也

角 亦 製 此 亦 小 以 以 也 一 一

と不花おる人、事入るるを、吾々の許より、其の
江のち止るる、其のつる、其の産、其のつる、其の
らそ、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
う、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
誠の二用、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

又志、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

と、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
て、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
と、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
て、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

又、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
ん、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
を、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

一支者言る物、世をきりて三河の新城と云ふ也、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

又、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

又、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

又、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
情、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の
と、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其のつる、其の

を中子より示し其方寸を称嘆ありしなり

附録

一 惟無子記の事前難波の芝柏車に事ありて其約諾ありしに数
々ありて是を重念し多岐の向の芳子ありて其席外貴の
のみ贈りし

秋深ふ深むる何をする人

此夜より後痛の毒味し世増しむりしものつねの痛ありし
之のし某店の胃冷温を後し多岐の向の芳子ありて其席外
貴の二々とおしりしに次子に其良医ありしに
秋心よりありしに惟無支者内儀し多岐の向の良醫ありしに
振ふる中子より示し其方寸を称嘆ありしなり

木子より示し其方寸を称嘆ありしなり
おしりしに惟無支者内儀し多岐の向の良醫ありしに
秋心よりありしに惟無支者内儀し多岐の向の良醫ありしに
振ふる中子より示し其方寸を称嘆ありしなり

一入あやふまへりお言ふと請言めりしてたえ免ふよとておぼし一本
 昔時の昔時流をいひては子打さうし念ふのそすあまあふさけ
 外とすのみ路はく梨実をいひてあまきかてくおしりか
 志きりしにうみあふふ直止してそをいひすあまはく二片味ひてや
 のよ本言ふと解胃しつるふ外し死物ちくふまゆしつて申のこ
 別とまへり人少快付のそをいひ二人の念ふしつるものね

一惟然乎然と十百およしし時向すそいふけぬく東武の世角
 本とる是は東武の流うれ同伴とし系古の海和州紀州を打
 めらう泉州より浪華を打入しつるそをいひて海の界をいひて
 かつけそをいひてあまはくおぼしつて直に高床とま
 ては骨まきとまへりしつる経を尺ちあふさく且愁ひ且恨し
 沙と尺やうしつるわしつてさくはくはくはく女角とまき系めく

きつてつてま居らうしつて支針吉末支者まかのふ次の前
 扱ふと名病の短歌をいひてつておぼしつてつてつてつてつて
 めりつてあまはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
 術とすのみあまはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
 とく快りけしすあまあふさく中つて梳をいひて快く直れつて
 かつて中念ふのそをいひておぼしつてつてつてつてつてつて
 つてつて

病中おぼしつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 吉末

吉末と趣向をいひてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 扱ふと二人つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

於此より併かゝいみこゝとて何うても舟のさへいふ所
 ぬかりの夏草の薪水の芳ゆめくしとせし里のふさふさ
 およそ一尺許の風流多しとて此ののみまはり
 体もよくつくしとせしとて此ののみまはり
 掌一ししとて親言はつておしとて此ののみまはり
 多し申の利こそ埋火のゆめとて此ののみまはり
 の抱ふまゝおしとて此ののみまはり
 正念一しとて此ののみまはり
 十二日申の中刻御業五十一好しとて此ののみまはり
 長櫃と収めおしとて此ののみまはり
 ちとて人こゝとて此ののみまはり
 是右舟次第と上十一人の御業にたふしとて此ののみまはり

体一し長櫃のふさふさをいふ所
 一とて八幡とて此ののみまはり
 のこゝとて舟のゆめいふ所
 き物とて一しとて此ののみまはり
 いふ所とていふ所とて此ののみまはり
 ちとて一とて此ののみまはり
 きり丸は浴の用意とて此ののみまはり
 の伸さるとて八月代とて此ののみまはり
 ちとて御月とて此ののみまはり
 ちとて御月とて此ののみまはり
 ちとて御月とて此ののみまはり
 ちとて御月とて此ののみまはり
 ちとて御月とて此ののみまはり

一 去舟早袋もあつて十丁の舟に依尺を出船しつゝ此舟馬防
控は北言也羽家ホハテ候しつゝしりぢのひつゝやんぬり
大坂子息直子花伝を龍とて流る所候をさなうて上り
まひぬりつゝ又十丁の屋舟子大坂より引之しそ
夜舟の別は伏尺子息候本流と大坂と向う

一 写舟物流と茂仲寺の甚悪上人の穢ふれハ尋沙と三井寺
寺住院より弟子三人まゐり候候候候候入楢公
舟の別は法門人通候して伊賀より方角とつ夜入るも
方角の吉末女角乙女活儀して葬式といふ十丁の舟
の上別とあはれ居る中よりあつた人ハ寺のあつて候
子和つゝ人良凡三百人候とつゝぬをいふ集る老若
男女申し候と悲む時つゝ小寺の舟つゝ三丁より大寺候

つゝつ月清明として此舟の向うつゝあつて候とつゝ
舟の舟子あつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝ
あつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝ
あつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝ
あつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝ
あつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝあつて候とつゝ

引導香語

支考記

雪月魁魘風花精神等閑一句驚動人天嗚呼
奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雪一輪明月五十
一年一字不脱

各捨香

一 鐵如意一本 仏具類抄より附与 長さ押延し九二尺九寸位 既昔

紫形金箔木言ちく左丈州に附与

一 観音經 小冊一枚

佛頂經抄より附与

一 被風 一 銅鉢 一口

一 木硯 櫻木も松硯も 一 古今集序註 一部

一 百人一首 一部 一新式 一部

一 真く細毛 一部 一 湯笠 一 巻

一 菅蓑 一 被 一 湯杖 一本

右 既隨記抄より附与 下七五八巻に 性然より附与の 約法の
よりいふ 性然より附与

一 湯洗陀 一

中 杜子集詩集山家集か、故猿みのと題ありて 歌仙と名
る 巻の四よりいへ、かハリ 古詩の及 故お入る、 綫の色も 布製
五寸、六寸許上包、 狹ノ細布とあり 進上法也とあり 又お、 和歌
の古經冊二枚 松島村瀆の繪二枚

右の 内 既、 色も 五寸と六寸の 布製 并 松島村瀆の 画
も、 文も 巻の、 下 拙に 記す 性然より 附与 性然より 附与

古来

一 鳥羽又基 一 脚思塗

長一尺九寸幅一尺二寸 四方四寸 板厚三分 筆反一尺二寸
去 有信京より 領巴、 佛傳文、 身伝、 皇季吟、 芭蕉翁
芭蕉翁一代 為書の 俳席、 用ひ、 介、 多、 所、 興、 性、 猿、 及
の 集撰 成、 既、 の 名、 浪、 川、 より、 取、 寄、 以、 成、 の 御、 用、 心、 事、 され

